# ZPTR照応解析：仕事は人生だった｜脱照応と火の搾取構造への過程

## 仕事と生活の未分化

かつての日本社会では、「仕事」と「プライベート」を切り分ける発想自体が存在しませんでした。家業は生活そのものであり、家屋そのものが生産の場、生活の場、学びの場でもありました。「ワークライフバランス」という言葉が登場する余地はなく、すべてが一体となった日常が当たり前でした。

## ひとつ続きの生活風景

居間の隣に作業場がある構造、食卓と仕事が重なり合う暮らしは、都市部や地方の町工場でも見られました。そこでは旋盤の音や油の匂いも家庭の一部であり、誇りや責任感は自然に内面化されていました。

## 生活基盤としての中小企業

中小零細企業や町工場でも生活が成り立っていた時代、地域の顧客に支えられた自律的な労働空間が存在していました。しかし現代では大企業集中と海外移転により、こうした基盤が急速に失われています。

## 「プロ精神」の萌芽

家業＝生活という未分化の構造のなかで、誇りや責任感は日常の中から育まれていました。これは「プロ精神」の萌芽であり、特別な訓練ではなく「生活の共鳴」から自然に生まれたものでした。

## 生活と誇りを結び直す

現代では仕事と生活が完全に切断され、「誇り」は仕事に宿らなくなりました。筆者の提案は、家業の復元ではなく、仕事と生活が再び交差する設計の模索です。そこにしか「プロ精神」を育む土壌は存在しない、と主張しています。

## 零細から大企業へ そして空洞化へ

高度経済成長を支えた家業や町工場は、大企業の海外移転に呑まれ消滅しました。この消滅は「誇りと生活の循環」の断絶であり、単なる雇用や経済の変化にとどまらない文化的喪失です。

## 統計に映らない空洞化

製造業の減少は統計上では見えるが、実態は国外移転による国内雇用の喪失です。これは日本でものづくりができない時代への移行であり、技術の衰退ではなく人件費重視による照応の喪失を意味します。